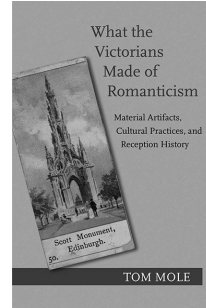


書 評

Tom Mole, *What the Victorians Made of Romanticism: Material Artifacts, Cultural Practices, and Reception History*
(Princeton: Princeton University Press, 2017)

アルヴィ宮本 なほ子



Tom Mole は、イギリス・ロマン主義文学、特にバイロンの研究を出発点とした研究者であるが、近年は、テキストを生み出すより広い知的ネットワーク全般を扱う Book History の研究者として活躍している。書物史とは、1980 年代ぐらいから、歴史研究、文学研究などの既存の様々な研究分野を横断して生まれた新しい領域横断型の研究分野である。英米文学研究の範囲では、ビブリオグラフィ、テキスト編纂などの伝統的分野が発展した形で書物史に組み込まれている。モウルは、2017 年にレヴィ (Michelle Levy) との共著 *The Broadview Introduction to Book History* と本書 *What the Victorians Made of Romanticism: Material Artifacts, Cultural Practices, and Reception History* を上梓した。書物史という分野の成り立ち、基本的な概念や事項を簡潔にまとめた概説書である前者に対して、後者は、この分野の専門家としてのモウルが、イギリス・ロマン派の詩人たちが、次の時代いかに「本」以外の新しいメディア (媒体) の中で変貌したかを専門的知識を駆使して提示したものである。ヴィクトリア朝の様々な新しいメディアによるロマン派詩人の “renovation project” (3) の検証というような新しい学際的研究を一人の著者が一冊の研究書に纏めるためには、様々な分野を関連付ける洞察力とその洞察力を支える高度に専門的な手腕、膨大な時間をかけた調査、大量のデータの取捨選択だけでなく、(著者ほど知識を持たない) 読者が途中で投げ出さないような構成と文体が必要だが、本書は、それら全てを兼ね備えた、分野横断型の野心的な企てとなっている。

モウルは、いくつかあるメディア研究のモデルの中から “media ecology” を選び、本という形で同時代の読者に受容されたロマン派詩人 (正確には、

ワーズワス、バイロン、シェリー、ヘマンズと詩人から小説家になったスコット)が、次の時代には、本以外のいくつかのメディアに移され、新しい時代に合うように「作」られ、同時代の人々——その多くが“nonreaders”(本を読まない人たち)である“Victorian audiences”(25, 99)——に体験されたことを詳細に論証する。文学テキストの時代を超える普遍的価値を認め、テキストの文学性とそれを鑑賞、継承できる後世の読者との関係の中で誤読を含めて影響や受容を考察する文学史的研究、アダプテーションの研究とは異なる新たな研究領域が提唱されている。従来の文学研究とは一線を画するにあたって、モウルは、ヴィクトリア朝に誕生した二つの異なる伝統の様式——文学を「読む」ことを前提とする制度化された学問の様式と制度の外で次々に生まれるメディアの様式——の両方に注目し、文学研究は、後者を研究対象に入れて知的地平を広げるべきだと考えている(25)。

本書は、短い序章「パブのドン・ジュアン」で、ヴィクトリア朝の時代に、ロマン主義詩人たちが、オリジナルの文学テキストとは異なる媒体にどのように出現したかという主題と本の構成について手短かに説明した後、短い三つの章から構成されている五つのパートで、ケース・スタディを用いながら、具体的に議論を進めていく。第1部「受容のウェブ」では、ヴィクトリア朝のメディア・エコロジーについての理論的説明、これまでの英文学研究で用いられた手法とメディア・エコロジーとの差異、研究の対象となる時代背景が簡潔に説明される。19世紀の最初の20年間でヴィクトリア朝初期に「時代遅れ」と感じられることが、「ジェネレーション・ギャップ」として説明され、この溝を埋めるために、文学テキストとは異なるいくつかのメディアでロマン派詩人たちを当世風にする試みが多々行われていたことが指摘される。続く四つの部では、各々、「挿絵入りの本」、「説教」、「彫像」、「文学作品のアンソロジー」という四つのメディアで、ロマン派の作品がどのようなヴィクトリア朝的相貌を見せるのか具体的に検証される。

第2部では、きわめて「現代的」な特徴を一時代前の作品に与えるヴィクトリア朝のメディア——モウルは“retrofitted illustrations”と名付けている(45)——が考察される。“retrofit”の意味を最もよく示す事例は、オウグル(Thomas Ogle)が写真の図版を入れた*Our English Lakes, Mountains*

and Waterfalls, as Seen by William Wordsworth, Photographically Illustrated (1864, 1866)である(第5章)。ワーズワス自身は挿絵を嫌っていたが、オウグルが同時代人を遠景に入れた写真、湖水地方の巨岩だけを写した写真を収録したことで、ワーズワスの詩や湖水地方案内は、一気に現代化され、また、中産階級の観光客の関心を集めることになった。

第3部「説教」は、教会の説教の中に断片化されて織り込まれるロマン派詩人たちの詩句が、キリスト教の教義をよく伝える「例」として、「本を読まない人々」に耳から注ぎ込まれたことを追跡している。文学研究では今までほとんど扱われていなかった説教の研究意義を示した学問的貢献は大きい。特に、無神論者であるシェリーが、“actively endorse and value”される詩人として(109)教会で受け入れられていく過程を例証する第8章、絶大な影響力を誇ったスパージョン(Charles Haddon Spurgeon)のバイロンを織り込んだ説教が、当時広く流通していた“nonacademic audiences”用の引用句集や逸話集(118)、バイロンの彫像などの新しいメディアの相互関係の中で生まれた新しいバイロンのイメージを再生産して拡散したことを論証する第9章は出色である。

第3部は、作品を「読む」後世の知的な読者を前提とする文学研究との違いを鮮やかに示す章でもある。モウルが、英文学研究の分野において意識した重要な先行研究は、Steven Gillの *Wordsworth and the Victorian* (Clarendon, 1998)ではなく、Richard Croninの *Romantic Victorians: English Literature, 1824–1840* (Palgrave, 2002)であろう。『ロマン派的なヴィクトリア朝人』は、ヴィクトリア朝的な道徳・宗教的規範とは相容れないシェリーの『イスラムの叛乱』を、1830年代の半ばにまだ若い聖職者——後のカンタベリー大聖堂の首席司祭、学術的著作でも令名を馳せたオールフォード(Henry Allford)——が、兄妹のように育った従妹の花嫁に、結婚記念の贈物として、その遊び紙にこの作品の読み方についての自作の詩を書いて贈る、という驚愕のエピソードを核として、「ロマン派的なヴィクトリア朝人」のロマン主義の受容と理解の仕方を解明する。クロウニン、ロマン主義的なものとヴィクトリア朝的なものという二項対立を用いない。文学テクストを読み継ぎ、書き継ぐロマン派的なヴィクトリア人たちは、ブルーム(Harold Bloom)の影響の理論とは違うやり方で先行者を創り出し、

モウルの言うところの「ジェネレーション・ギャップ」を解消する。オールフォード、テニソンなどの詩を読み継ぎ、書き継ぐ者たちは、シェリー的な革命的で危険な恋愛を家庭的愛情に作り変える。小説を読み継ぎ、書き継ぐ者たちは、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』の第3版の改訂(1831)、ディズレーリの『ヘンリエッタ・テンプル』(1837)で従妹との結婚が回避されるように、詩人たちとは別の作り変えを行っている。モウルの研究により、本を読まない人々が別のメディアでロマン派詩人たちを新しく作り変えることが示され、後代におけるロマン派の受容の多様性、多義性がさらに広く、深く探求されるべき研究分野であることが明らかになった。

宗教的なメディアを扱う第3部と世俗的なメディア(世俗的英雄たちの彫像、それらを祭る殿堂)を扱う第4部「彫像」は鮮やかな対比を示す。ケンブリッジやロンドンのバイロンの彫像、エディンバラのスコットの記念碑は、ヴィクトリア朝の都市風景を一変させ、観光ブームにも寄与した。1894年に誕生した最新の技術(クロモ石版刷)を用いた“picture postcards”は、郵便システムを使ったカードのやり取りを爆発的に増大させ、また、蒐集の対象ともなった。今ではレトロな「絵葉書」や郵便という通信手段は、ヴィクトリア朝時代には、ツイッターやインスタグラムに比せる庶民の手に届くようになった最新の技術を組み込んだメディアであった。この時代の様々な新しいメディアを相互的、複合的に利用しながら、本を読まない新時代の人々がロマン派の新しいイメージを体験し、拡散し、更新していく様子は、メディア研究の手法で初めて捉えられるものである。

第5部では、210冊の詩華集のデータ分析という手法が用いられる。モウルは、自分の手法を、モレットティの「遠読」の異種であるが、正典から切り離されるテキスト、その異文を注意深く検証する点で、ミュラー(Martin Mueller)のテキストベースの「スケーラブル・リーディング」(“scalable reading”)に貢献するものと説明している(194, 275 n.33)。このやり方で、アンソロジーで人気の高いヘマンズの詩が、ヘマンズの作品の中で重要である詩と一致しないことが明かされるが(第14章)、この方法が最も効果を発揮するのは、第15章のロマン派の長詩が、アンソロジーの中で、原形を留めない形に細分されて新しい詩として生まれ変わることを、

バルトの『S/Z』のひびを入れたテキストという概念を援用して考察する部分である。『貴公子ハロルドの巡礼』のバイロンのワーテルロー訪問を反映させた一節は、ほとんど全てのアンソロジーで、短い行数にするため、ナポレオンへの想いを表白した部分を収録しない。オリジナルの詩作品と次の時代のアンソロジー・ピースとしてコンテキストを取り払われ断片化して独立した詩のそれぞれの特徴が際立つ。ただし、碎かれた文学テキストがメディアを横断して転生してゆく歴史を「悲観的」に捉えるか、「楽観的」に捉えるかは、意見が分かれるところであろう(223)。

本書には、「序章」に対応する「結論」はない。その代わりに、第5部の最後に短いコード「オリンピックのオジマンディアス、あるいは彼女はブリクストンを歩く」がつき、切り裂かれ、別のメディアへ流転し、新しい形で拡散するロマン派の詩の運命をさらに辿ろうと思う読者のために、二つの現代の例が示される。2012年のロンドン・オリンピックの閉会式でエミリ・サンディ(Emeli Sandé)の歌う“Read All about It”の第3部を聴きながら観客が目にするシェリーの「オジマンディアス」の断片とバイロンの「彼女は美を纏って歩く」の断片。オリンピック会場の外の多くの通りの壁に描かれた、落書きアーティストのアロフィッシュ(Arofish)による喪服ではなくタンクトップとミニスカートのバイロンの「彼女」のステンシル画。「受容のウェブ」がこのように紡がれるとき、未開拓の広大な領域が、メディア・エコロジーの「結論」の前に広がっている。

——東京大学教授